

平成25年度 厚生労働科学研究費 創薬基盤推進研究事業
分担研究報告書

ワクチン開発における霊長類を用いた基盤技術の開発

研究分担者：保富康宏 医薬基盤研究所 霊長類医科学研究センター センター長

研究要旨

経鼻投与ワクチンは近年、急速に開発が行われているが、その粘膜局所における解析はヒトと抗原認識機構が異なるマウス等以外ではほとんど行われていない。本研究ではカニクイザルに全粒子不活化インフルエンザウイルスを経鼻投与し、その変化を解析した。鼻粘膜では投与後6時間で炎症が認められ24時間後ではその炎症が消滅した。また、ウイルス抗原も6時間後にはマクロファージ等に粘膜固有層に伝達されていたが、24時間後には抗原は認められなかった。以上の事から粘膜投与ワクチンでは急性炎症を誘発し、抗原が取り込まれ、24時間以内にはその反応が消滅していると考えられた。

A. 研究目的

近年、急速に研究、開発が行われている経鼻投与ワクチンは粘膜免疫を誘導することから、その効果に期待が寄せられている。しかしながらその局所反応や免疫系の認識機構の解明はヒトと構造や抗原認識機構が異なるマウス等で行われているのが大半である。カニクイザルはヒトに極めて近い鼻腔内の構造をもっており、ヒトと同様マウス等で抗原認識に重要な組織である NALT も保持していない。本研究ではヒトに類似の構造を持つカニクイザルにおいて粘膜ワクチン投与時における病理学的変化と抗原の認識について検討し、ヒト経鼻投与ワクチンへの新たな知見を与えることを目的とした。

B. 研究方法

カニクイザル(6~11歳、2.8~3.5kg)を麻酔投与下、仰臥位で固定後、鼻腔より不活化全粒子インフルエンザウイルスを滴下し、10分間保持した。投与後0時間(コントロール)6時間、24時間後に解剖を行い、ホルマリン固定の後、HE染色にて鼻粘膜の病理的解析を行った。また、抗ウイル

スモノクローナル抗体、抗マクロファージ抗体(Iba1)およびDAP1による免疫組織化学染色を行った。

(倫理面への配慮)

本研究では動物実験申請等の必要な委員会での承認は既に得ており、ヒトサンプル、情報等は一切用いていない。

C. 研究結果

鼻粘膜にウイルス液滴下後6時間で既に炎症像が認められるが、その炎症は24時間後では消滅していた(Fig.1)

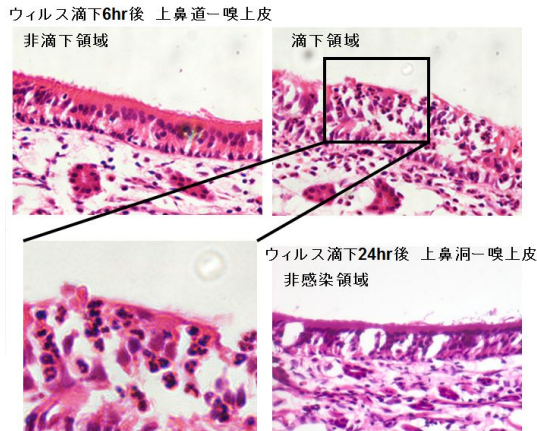


Fig. 1 ウイルス液滴下後の組織変化

この時のウイルス抗原は上皮細胞に強く認められ、一部は固有層のマクロファージに取り込まれていた (Fig. 2)。

ウイルス滴下6hr後 上鼻道 - 嗅上皮

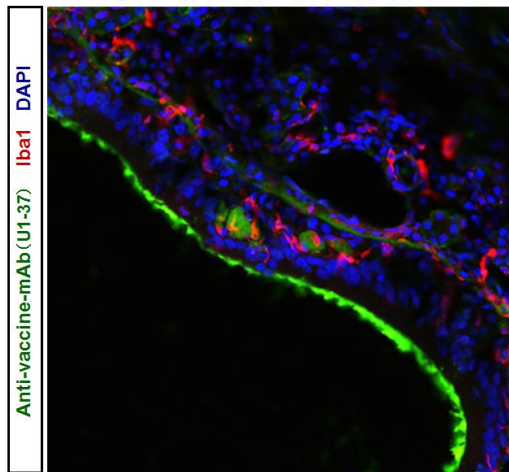


Fig. 2 ウイルス液滴下後のウイルス抗原およびマクロファージ

また、24 時間後ではウイルス抗原は認められなかった (Fig. 3)。

ウイルス滴下24hr後 上鼻道 - 嗅上皮

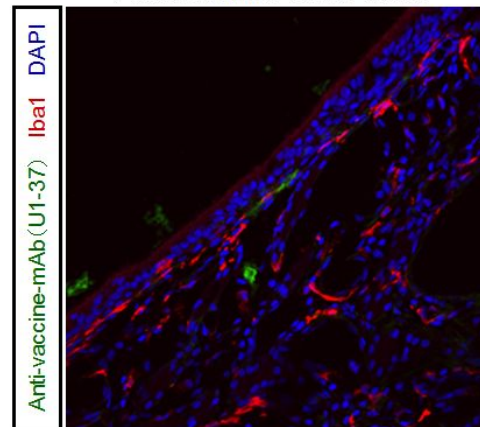


Fig. 3 ウイルス液滴下後のウイルス抗原およびマクロファージ

以上の事より経鼻投与におけるワクチン抗原は急速な炎症を引き起こすが、非常に短時間経あり、鼻粘膜上皮における抗原も短時間で吸収、消失すると考えられた。

D. 考 察

インフルエンザを初め経鼻投与とワクチンは呼吸器等の粘膜免疫誘導に優れていることから研究、開発が急速に進歩している。実験動物を用いた解析も同様に急速に進歩し多くの報告がなされている。しかしながら、マウス等の実験動物は呼吸器粘膜における抗原の認識機構が異なり、ヒトとの比較が困難である。カニクイザルはヒトと類似の構造をもち、抗原認識機構においても、極めて類似の機構であると考えられる。本研究ではヒトでは知見を得ることが出来ない感染初期における抗原発現や局所の変化がカニクイザルにおいて検討され、呼吸器等の粘膜感染の病態研究や今後も開発が進むであろう粘膜投与ワクチンにおいて多くの治験を与えると考えられた。

E. 結 論

経鼻投与ワクチンの粘膜での病態解明は
霊長類で多くの知見が得られると考えられ
た。

F. 研究発表

1. 論文発表

- 1) Watanabe K., Matsubara A, Kawano M, Mizuno S, Okamura T, Tsujimura Y, Inada H, Nosaka T, Matsuo K. and Yasutomi Y. Recombinant Ag85B vaccine by taking advantage of characteristics of human parainfluenza type 2 virus vector showed Mycobacteria-specific immune responses by intranasal immunization. Vaccine in press
- 2) Kobiyama K., Aoshi T., Narita H., Kuroda E., Hayashi M., Tetsutani K., Koyama S., Mochizuki S., Sakurai K., Katakai Y., Yasutomi Y., Saijo S., Iwakura Y., Akira S., Coban C. and Ishii KJ. A non-agonistic Dectin-1 ligand transforms CpG into a multitask nano-particulate TLR9 agonist. Proc.Natl.Acad Sci. USA in press
- 3) Wada T, Kohara M, Yasutomi Y.DNA vaccine expressing the non-structural proteins of hepatitis C virus diminishes the expression of HCV proteins in a mouse model. Vaccine 2013;31;5968-5974.
- 4) Kitagawa H, Kawano M, Yamanaka K, Kakeda M, Tsuda K, Inada H, Yoneda M, Sakaguchi T, Nigi A, Nishimura K, Komada H, Tsurudome M, Yasutomi Y., Nosaka T, Mizutani H. Intranasally administered antigen 85B gene vaccine in non-replicating human Parainfluenza type 2 virus vector ameliorates mouse atopic dermatitis. PLoS One. 2013 8(7): e66614
- 5) Shimozawa N, Ono R, Shimada M, Shibata H, Takahashi I, Inada H, Takada T, Nosaka T, Yasutomi Y.Cynomolgus monkey induced pluripotent stem cells established by using exogenous genes derived from the same monkey species. Differentiation. 2013 85:131-139.
- 6) Tajiri K, Shimojo N, Sakai S, Machino-Ohtsuka T, Imanaka-Yoshida K, Hiroe M, Tsujimura Y, Kimura T, Sato A, Yasutomi Y., Aonuma K.Pitavastatin regulates helper T-cell differentiation and ameliorates autoimmune myocarditis in mice. Cardiovasc Drugs Ther. 2013, 27:413-424.
- 7) .Saito A, Nomaguchi M, Kono K, Iwatani Y, Yokoyama M, Yasutomi Y., Sato H, Shioda T, Sugiura W, Matano T, Adachi A, Nakayama EE, Akari H.TRIM5 genotypes in cynomolgus monkeys primarily influence inter-individual diversity in susceptibility to monkey-tropic human

- immunodeficiency virus type 1. *J Gen Virol.* 2013 Jun;94(Pt 6):1318-24.
- 8) Yoshida T, Omatsu T, Saito A, Katakai Y, Iwasaki Y, Kurosawa T, Hamano M, Higashino A, Nakamura S, Takasaki T, Yasutomi Y, Kurane I, Akari H. Dynamics of cellular immune responses in the acute phase of dengue virus infection. *Arch Virol.* 2013,158:1209-20.
- 9) Tougan T, Aoshi T, Coban C, Katakai Y, Kai C, Yasutomi Y, Ishii KJ, Horii T. TLR9 adjuvants enhance immunogenicity and protective efficacy of the SE36/AHG malaria vaccine in nonhuman primate models. *Hum Vaccin Immunother.* 20139(2) 283-290.
- 10) Nomaguchi M, Yokoyama M, Kono K, Nakayama EE, Shioda T, Saito A, Akari H, Yasutomi Y, Matano T, Sato H, Adachi A. Gag-CA Q110D mutation elicits TRIM5-independent enhancement of HIV-1mt replication in macaque cells. *Microbes Infect.* 2013 5:56-65.
2. 学会発表
- 1) Watanabe K, Matsuo K, Yasutomi Y. Intranasal immunization with recombinant vaccine by taking advantage of characteristics of human parainfluenza type 2 virus vector showed mycobacteria-specific immunity. 第42回日本免疫学会学術集会, 2013年, 千葉
- 2) TSUJIMURA Yusuke, YASUTOMI Yasuhiro. The recognition mechanisms of Mycobacteria major secretion protein, Ag85B, in vivo 第42回日本免疫学会学術集会, 2013年, 千葉
- 3) 加藤誠一 保富康宏 松尾和浩. BCGウレアーゼ欠損株を用いたエイズワクチン第3回感染症若手フォーラム 長崎 2014
- 4) 岡村 智崇、松尾 和浩、保富 康宏. 抗酸菌分泌抗原を組み込んだ弱毒エイズウイルスの霊長類カニクイザルにおける細胞性免疫反応の解析第61回日本ウイルス学会 神戸 2013年11月10日-12日
- 5) 岡村 智崇、松尾 和浩、保富 康宏. 産地別SPFカニクイザルを用いたサル免疫不全ウイルスのエイズ病態に関する研究第27回日本エイズ学会 熊本 2013年11月20 - 22日
- 6) 保富康宏 インフルエンザウイルス感染におけるヘルパーT細胞 (Th) の病態への関与 「シンポジウム: もっと効くインフルエンザワクチンを目指して」第54回日本臨床ウイルス学会 2013年6月8-9日 倉敷
- 7) 保富康宏 教育講演: 「ワクチン開発のストラテジー: HIVワクチン・結核ワクチン開発の経験から」ワクチン開発に必要な研究を取り巻く環境の重要性 第17回日本ワクチン学会 2013年11月30日-12月1日 津

厚生労働科学研究費補助金（創薬基盤推進研究事業）

分担研究報告書

霊長類由来研究資源の保存技術の高度化

分担研究者 山海 直 独立行政法人医薬基盤研究所霊長類医科学研究センター、
主任研究員

研究要旨

カニクイザルは様々な医科学研究に用いられている。その研究資源の確保のため、繁殖・育成技術を向上させる意義は大きい。また、疾患モデルを構築することでより使用範囲を広げることが可能となり、基礎データの蓄積により得られたデータの解析を補助することができる。本研究では、霊長類資源の保存、繁殖技術の向上を目的として、1) 霊長類由来研究資源の開発・保存技術の高度化、2) カニクイザル胎児由来 DNA 解析による雌雄判定技術の高度化、3) 繁殖効率向上のための基礎データの解析という課題に取り組んだ。また、疾患モデルの開発を目的として4) 新規疾患モデルの作成を目指した子宮内膜症誘発研究を実施した。

A. 研究目的

1) 霊長類由来研究資源の開発・保存技術の高度化

今回、凍結保存された卵巣の移植後の状況を検索した。卵巣はメスの生殖細胞である卵細胞を保有し受精可能な状態に成熟させる臓器である。性ホルモン分泌という内分泌機能も有しており、次世代を残すための重要な臓器である。その卵巣の保存技術の開発はメス生物資源の長期保存が可能となるだけでなく、ヒトへの臨床応用が考えられる。これまでにカニクイザルの卵巣まるごとの保存、融解した卵巣の移植実験を行い、本技術が研究資源の保存に応用できる可能性を見出してきた。ここでは約6年前に移植した個体の卵巣が機能について月経を指標として検索した。

2) カニクイザル胎児由来 DNA 解析による雌雄判定技術の高度化

母体血中の胎児由来セルフリーDNA は、胎児疾患の検出と雌雄判定等に有用である。PCR 法による遺伝子の検出において、Y 染色体に存在する *SRY* (Sex determining region Y) はシングルコピー遺伝子であるため、Y 染色体を持たない母体の血中を循環している胎児 DNA の検出限界の決定で利用されることが多い。いくつかの遺伝子を組み合わせることで、母体血清中の胎児 DNA をより高い感度と特異性で定量されると期待され

る。今回、感度と特異性を改良する目的で、Y 染色体上の *TSPY* (testis-specific protein, Y-linked) 領域内で高頻度に反復している *DYS14* 配列の増幅を試みた。

3) 繁殖効率向上のための基礎データの解析

研究用サル類の繁殖コロニーを保持するうえで、繁殖効率を向上させる意義はきわめて大きい。大規模繁殖コロニーにおいて、いかに効率よく初産を経験させるかが大きな課題の一つとなっている。そこで、初産に焦点をあてて基礎データを解析した。また、性成熟しているにも関わらず妊娠しない個体が存在することからその要因の一端を明らかにすることを目的とした実験を行った。

4) 新規疾患モデルの作成を目指した子宮内膜症誘発研究

マウス・ラットなどの小動物の性周期はヒトと異なり、子宮内膜症の実験動物モデルとしては様々な観点から限界があるといえる。ヒトと同様の月経周期を有するサル類では、これまでにヒヒを用いた子宮内膜症誘因に関する成果が報告されている。今回、実験動物としての基礎データが豊富なカニクイザルを対象として子宮内膜症の誘因を試みた。

B. 研究方法

1) 霊長類由来研究資源の開発・保存技術の高度化

約6年前に5頭のカニクイザルから卵巣を摘出し、まるごと凍結した。1ヶ月の間、液体窒素中で保存し、その卵巣を融解して元の個体に移植した。

凍結は微弱エネルギーを負荷した環境でマイナス30℃までプログラムフリーザーを用いて低下させ、その後、液体窒素に入れるという手法で実施した。融解は、37℃のお湯に浸漬することで行い、その卵巣を大腿の骨格筋内あるいは腎皮膜下に移植した。移植した5頭のうち4頭で比較的早期に月経が出現することを確認しており、性ホルモンの動態からも凍結融解卵巣が機能していることを見出した。これらの個体は現在も外見上問題なく生存しており、今回、月経の状況より卵巣機能について検索した。

2) カニクイザル胎児由来 DNA 解析による雌雄判定技術の高度化

マルチコピー配列である DYS14 とシングルコピー遺伝子の SRY は、マルチプレックス定量 PCR で検出した。PCR による検出は妊娠 5、12、22 週の妊娠カニクイザルの血漿から DNA を抽出して行った。胎児性別判定は出産時に外陰部の形態により確認した。今回の定量結果はリアルタイム PCR で行い、常染色体上のシングルコピー遺伝子である NQO1 (NADPH: quinone oxidoreductase) の定量結果と比較した。

3) 繁殖効率向上のための基礎データの解析

当センターでは3あるいは4歳の月経が認められるメスは、妊娠させることを目的としてオスと同居させている。これらのメス個体の妊娠成績を解析した。また、オス1頭が2頭のメスと1日おきに同居する交配方法(隔日同居)を設定し、雌雄同居の翌日にメスの膣スミアを顕微鏡で観察した。すなわち、膣スミア中の精子の有無により交尾の成否を確認した。実験には6セット計12頭(経産4頭、未経産8頭)のメスカニクイザルを用いた。

4) 新規疾患モデルの作成を目指した子宮内膜症誘発研究

全身麻酔下でカニクイザルの下腹部正中を切開して開腹し子宮を露出させた。子宮の一部を切除して子宮筋層とともに子宮内

膜を採取した。筋層を少し残して子宮内膜をトリミングし数箇所の腹壁に縫合した。さらに細切した子宮内膜を腹腔内に散布した。これらの処置は黄体期に実施した。術後、疼痛緩和を目的としてブプレルノフィンを投与した。術後は毎日の個体観察を行い、定期的に血液検査、MRI および腹腔鏡下の観察を実施して、病態を評価した。

(倫理面への配慮)

本研究は医薬基盤研究所の動物実験委員会の承認を得て実施した。実験実施時の動物への苦痛の軽減を原則とし飼育環境の整備にも十分に配慮した。

C. 研究結果

1) 霊長類由来研究資源の開発・保存技術の高度化

まるごとの卵巣を凍結、そして融解後移植した5頭のカニクイザルは、移植後、約6年経過しているにも関わらず、月経が認められる個体が存在することが明らかとなった。直近3年間に確認された月経の回数はそれぞれ、13、8、3、3、1回であった。

2) カニクイザル胎児由来 DNA 解析による雌雄判定技術の高度化

定量 PCR によって、NQO1、SRY、DYS14 のコピー数が、絶対定量として測定された。セルフリーDNA の絶対定量の平均コピー数は、血漿中で 2.24×10^4 コピー/ml で、妊娠初期と後期での違いは認められなかった。セルフリーDNA 中の、DYS14 配列の検出は SRY よりも10倍の高感度であった。さらに、SRY と DYS14 の PCR 反応あたりで検出されたコピー数を比較すると、DYS14 は SRY よりもより多く検出されることが明らかとなった。

3) 繁殖効率向上のための基礎データの解析

室内繁殖コロニーのカニクイザルは5あるいは6歳のときに多くが初めての妊娠することがわかった。また、そのとき妊娠しなかった個体においてもオスとの同居を継続することで妊娠する個体は存在するが、10歳くらいになっても一度も妊娠できない個体も存在することが明らかとなった。さらに、5、6歳で妊娠した個体は月経周期あたりのオスとの同居回数が4回以内で妊娠

していた。

隔日同居を行ったメスの膣スミアを観察した結果、8頭の未経産メスではほとんど精子が確認できず、4頭の経産メスでは月経周期に関わらない交尾の成立が認められた。

4) 新規疾患モデルの作成を目指した子宮内膜症誘発研究

誘因処置後、食餌の摂取量および体重減少は認めなかった。1か月後の腹腔鏡下の観察において、使用したすべての個体で縫合した子宮内膜が生着していることを確認した。また、縫合部位以外に小さな病変を認めた個体もいた。また、移植片の生着のみならず嚢胞形成を認めた個体も存在した。

D. 考察

1) 霊長類由来研究資源の開発・保存技術の高度化

ヒトにおいて、様々な手法で卵巣凍結が試みられている。融解、移植後、その卵巣から採取した卵を用いて子どもを得たという報告があるが、移植した卵巣の機能が失活するという課題が残っている。これまで試みられてきた方法は、卵巣を薄くスライスするものが多い。今回、用いた方法はまるごとの卵巣の凍結保存である。理論的には、大きな塊の凍結は困難と考えられているが、凍結時に磁場を暴露することで、凍結するときの液体成分の膨張が抑えられることを確認している。

移植後、約6年経過しており、それぞれの個体の生殖年齢も配慮する必要があるかも知れないが、直近3年間に月経が13回確認できた個体が存在する意味は大きい。ただし、カニクイザルの月経周期は約28日ということを考えるとこの個体も規則正しい月経が認められたとは言い難い。今後、性ホルモンの動態とあわせて解析する必要があると考えている。

2) カニクイザル胎児由来 DNA 解析による雌雄判定技術の高度化

母体血中の胎児由来 DNA が循環しており、オス特異的 DNA を検出することで、雌雄判定が可能となる。これまでにリアルタイム PCR では非常に高い感度と特異性を認め、妊娠5週の個体において100%の確立で雌雄判定が可能であることを実証している。

今回の研究により、DYS14 はきわめて高感度で検出できることが確認された。現在は妊娠5週以降の個体で検証しているが、着床後何日目かで検出可能か検証したい。着床後、胎盤が形成され、その直後から微量な胎児由来 DNA が母体の血中を循環している可能性があるが、どのような経路、機序でこのようなことが起きているかは明らかになっていない。また、胎児由来 DNA が母体血中を循環することにどのような意味があるのか、生物学的な意味を解明することは重要である。動物実験ではオス特異的な DNA の検出が実験系として構築されたが、遺伝子関連疾患の検出や機序解明を目的とした研究を進展させるためには、さらなる基礎技術の開発研究を継続しなければならない。

3) 繁殖効率向上のための基礎データの解析

室内繁殖コロニーのカニクイザルの多くが5あるいは6歳のときに初めて妊娠するという興味深い結果が得られた。月経の発現はより若くして認められるが、月経の発現だけでは生理学、社会学、あるいは行動学的に完全な性成熟を迎えたとは言えないのかも知れない。また、月経周期あたり4回程度で妊娠に至る個体が多いということは、繁殖効率を考えたシステムを構築するうえで有用なデータである。この4回の月経周期の間にメスが生理学的に成熟するのか、複数回オスと同居することで社会的な成熟を迎えるのかを明らかにしていくことは生物学的にもたいへん意義あるものと考えている。

隔日同居を行った実験では、明確に妊娠経験がある個体で膣スミア中の精子が確認されている。すなわち、妊娠経験がある個体のほうが未経産個体とくらべて交尾が成立し易いといえる。この結果は、妊娠という経験が生殖器の機能に影響し、交尾が成立している可能性がある。あるいは、妊娠経験が社会学、行動学的に生殖行動に関する学習に関連しているのかも知れない。今回用いた個体はすべて定期的なメンスを確認しており、3ヶ月にわたり隔日同居を行っている。すなわち、3回の排卵時期が含まれていることになるが、その排卵時期とは関係なく交尾が成立しているという結果はサル類の特性を示していると考えられる。

すなわち、妊娠する可能性がない時期においても交尾を行っていることになり、交尾行動が社会性を構築することに関連していることを示唆している。

4) 新規疾患モデルの作成を目指した子宮内膜症誘発研究

子宮内膜症はヒトの婦人科領域の疾病として多くの研究者が治療法の開発研究に取り組んでいる。しかし、未だ明確な発症要因もわかっていない疾病であり、画期的な成果があがっていない。このような研究を進展させるためにも、優れた動物モデルが必要とされており、月経周期を有するサル類でのモデル作成が望まれている。これまでに、ヒヒを用いた子宮内膜症の誘発実験が報告されていたが、その他のサル種での詳細な報告はない。今回、カニクイザルを用いて高率に子宮内膜を腹壁に定着させることができた意義は大きい。また、縫合により子宮内膜を移植した部分以外にも、小さな病変を確認している。これは腹腔内に散布した子宮内膜が定着した可能性が高く、より自然発症に近い状況と言えるかも知れない。今回は、1年以内の観察で評価しているが長期観察により、このような病態がどのように変化していくか観察していく必要があるだろう。本手法により、子宮内膜症の発症過程の解析が可能となり、また、治療薬の効果の評価も可能になる可能性がある。

E. 結論

今回、霊長類資源の保存、繁殖、疾患モデルに関する研究を実施し、以下の4つの結論を得た。

1) 磁場暴露環境下で凍結したカニクイザルのまるごとの卵巣を融解し移植後の卵巣の機能を月経発現より確認した。移植後、約6年が経過しているにも関わらず、月経が確認できる個体が存在することが明らかになり、本凍結法が塊、すなわち組織や臓器の凍結にも応用できる可能性が示唆された。

2) カニクイザルの母体血中に存在するオス胎児由来 DNA 解析を試みたところ、DYS14が SRY よりもさらに高感度で検出できることが確認された。本研究は、様々な胎児 DNA を母体血中から検出するための手法の開発

の可能性を示すものである。

3) カニクイザルの初産に焦点をあてた解析を行ったところ、5、6歳で初めて妊娠する可能性が高いことがわかった。また、未経産メスはオスと同居しても交尾しないことが多く、明らかに経産歴があるメスが交尾しやすいという結果を得た。その交尾時期は月経周期と関連がないことも多いということが明らかになった。

4) カニクイザルの子宮内膜を腹壁に縫合あるいは散布したところ、高率に生着することが確認された。カニクイザルを用いた子宮内膜症誘発が可能となり、子宮内膜症モデルと成り得る可能性が示された。

F. 研究発表

1. 論文発表

M. Hatori, N. Shimozawa, L. Yasmin, H. Suemori, N. Nakatsuji, A. Ogura, K. Yagami, T. Sankai

Role of retinoic acid and fibroblast growth factor 2 in neural differentiation from cynomolgus monkey (*Macaca fascicularis*) embryonic stem cells

Comparative Medicine (in press)

2. 学会発表

(国際学会)

M. Iwamoto, S. Yazaki, T. Oishi, K. Inoue, A. Ogura, T. Sankai

Production of transgenic cynomolgus monkey embryos using interspecies somatic cell nuclear transfer

The 10th Annual Meeting of Asian Reproductive Biotechnology Society (ARBS) (Hochiminh, Viet Nam) August 19-25, 2013

J. Otsuki, L. Yasmin, Y. Nagai, A. Lopata, T. Sankai

The influence of ooplasmic volume on pronuclear development
69th American Society for Reproductive Medicine Annual Meeting (ASRM) (Boston, U.S.A.) August 12-17, 2013

(国内学会)

根津幸穂、西本（垣内）綾子、林 修次、
加藤淳彦、伊藤恒夫、岡林佐知、Lubna
Yasmin、満下淳地、根東 攝、山海 直、
今野 良
カニクイザルにおける子宮内膜症外科的誘
因モデルの作出
第 35 回エンドメトリオーシス学会（鹿児
島）2014 年 1 月 25、26 日

持田菜穂子、長谷川昭子、山海 直、細田
容子、荻野 舞、柴原浩章
カニクイザル卵巣における卵胞発育調節因
子の発現解析について
Expression of follicle growth regulating
factor in monkey ovarian tissue with
immunohistochemical analysis
第 54 回日本卵子学会（東京）2013 年 5 月
25 日

吉田麻衣子、小山高正、山海 直
室内飼育環境下におけるカニクイザルのパ
ートナー選択の特性
Characterization of choosing mating
partner of cynomolgus monkeys in
laboratory breeding colony
第 60 回日本実験動物学会（つくば）2013

年 5 月 15-17 日

Lubna Yasmin、高野淳一郎、永井 泰、大
月純子、山海 直
Taqman PCR 法と Southern blot
hybridization 法を用いた妊娠カニクイザ
ル血清中胎児由来 DNA の検出
Fetal DNA detection from pregnant
cynomolgus monkeys by Taqman PCR and
Southern blot hybridization
第 60 回日本実験動物学会（つくば）2013
年 5 月 15-17 日

吉田麻衣子、小山高正、山海 直
飼育カニクイザルによるオスのパートナー
選択実験
第 73 回日本動物心理学会（つくば）2013
年 9 月 14-16 日

3. その他

山海 直
IVF J NEWS 2013, No.56
内容：卵巣まると保存の現状と課題

G. 知的財産権の出願・登録状況

なし

厚生労働科学研究費補助金(創薬基盤推進研究事業)

分担研究報告書

カニクイザルのホルモン解析による繁殖技術の確立

分担研究者 下澤 律浩

独) 医薬基盤研究所霊長類医科学研究センター、主任研究員

研究要旨

本研究では創薬研究等に貢献するカニクイザルにおいて、動物資源の高度化、疾患モデルの開発や維持のために、繁殖技術の基盤を強化する意義は大きい。そこで、生殖ホルモン動態から排卵時期を調べたところ、従来の繁殖方法である月経後 11-14 日の雄との同居期間に排卵が生じると推定された未経産雌の割合が 48.9% (23/47) であった。一方、経産雌においては、同居期間中の雄との同居の割合は 64.3% (9/14) であり、これは有意に未経産雌と比較し有意に高かった。現状の雄との同居期間である月経後 11-14 日を月経後 11-18 日に変更することで、同居期間に排卵する未経産個体の割合は 48.9% (23/47) から 63.8% (30/47) に上昇する。未経産個体においては、月経後 11-18 日の 7 日間に雄との同居が効率的に妊娠を得る一つの有効な手段であると考えられた。

A. 研究目的

独立行政法人医薬基盤研究所霊長類医科学研究センターは我が国で唯一の医科学研究を目的とし、1,500 頭以上のカニクイザルのコロニーを維持し、SPF 化している。このカニクイザルの中には、拡張型心筋症あるいは網膜黄斑変性症のようなヒト疾患モデルとして貴重な家系も存在する。しかしながら、当センターのサルは設立以来、約 30 年以上外部からカニクイザルは導入されておらず、室内環境に馴化されて来た。設立時に採用された繁殖方法が妥当であるか否かを再確認する必要があり、現状に即した繁殖技術の確立が必要である。

本研究ではこのような創薬研究に貢献するカニクイザルにおいて、動物資源の高度化、疾患モデルの開発や維持のために、現状に即した繁殖技術の基盤を強化する意義は大きい。そこで、具体的には生殖ホルモン動態を調べ、排卵時期を明らかにすることで、現状に即した繁殖方法に応用する基盤を構築することを目的とする。当センターのようなクローズドコロニーの飼育環境下にあるカニクイザルの排卵時期は調べられていない。排卵時期を明らかにすることで、カニクイザルの効率的かつ計画的な繁殖・維持に貢献すると考えられる。

B. 研究方法

本研究は独立行政法人医薬基盤研究所霊長類医科学研究センターで飼育管理されているカニクイザルを用いて実施した。今後のコロニー維持を担う比較的若い妊娠経験のない5-6才の未経産雌を選抜し、生殖ホルモンの定期的なモニタリングを行い、その排卵時期を調べる。なお、詳細な方法は以下に記す。また比較のために、妊娠経験のある8-21才の経産個体についても同様に調べた。

当センターの主な繁殖方法は、月経初発後の11日目の午後から14日の午前までの3日間に雄との1対1同居である。基本的にこの同居期間に排卵が生じなければ、例え交配が行われたとしても妊娠は成立しない。そこで、雄との同居期間中に排卵が起こっているか否かを調べるために、血中エストラジオール(E2)を測定した。月経後およそ8日目から適時、血液を採取し、分離した血清中のE2値を蛍光酵素免疫装置(AIA-360)で測定した。一般的に、排卵はE2のピーク値の翌日に生じる。E2値については100 pg/ml以上の差が生じた時にピークを過ぎたものと判断した。また、排卵する頃に分泌量が上昇する妊娠の維持に必要なホルモンであるプロゲステロン(P4)も同様に測定した。

(倫理面への配慮)

カニクイザルを使用するにあたり独立行政法人医薬基盤研究所の動物実験委員会の審査を受けている。実験実施時の動物への苦痛の軽減を原則とし飼育環境の整備にも十分に配

慮した。

C. 研究結果

従来の繁殖方法である雌雄同居期間(月経後11-14日)に排卵が推定できた未経産個体の割合は48.9%(23/47)、およびそれ以後(月経後15-24日)に排卵した割合は31.9%(15/47)であった(図1)。一方、経産個体において、月経後11-14日に排卵が推定できた割合は64.3%(9/14)、およびそれ以後(月経後15-24日)の割合は28.6%(4/14)であった(図1)。雌雄同居期間に推定された排卵の割合において、未経産個体は経産個体と比べ、有意に低かった($p < 0.05$)。また、P4においては、排卵時期に上昇することから、E2およびP4の両者を測定することで、排卵時期が判断しやすくなることも確認できた。

未経産および経産個体の残りの個体については、約2週間ホルモンの測定を行ったが、排卵を推定できなかった。その割合は、それぞれ19.1%(9/47)および7.1%(1/14)であり、前者は有意に高かった($p < 0.05$)。

D. 考察

従来の繁殖方法である月経後11-14日の同居期間に、排卵が生じると推定された未経産雌はおよそ半数であることが明らかになった。一方、経産雌においては、同居期間中の雄との同居は6割に達し、これは未経産雌の場合と比べ、有意に高かった。このような現状は、今後のコロニーマネジメントに対し、負の影響を及ぼす。つまり、

未経産個体の不妊が多くなれば、それだけ実験に供給できる個体が削減され、コロニーの肥大化に至る恐れがあるからである。そのようなことに対処するために、雌の排卵時期と雄との同居を同期させ、交配する状況を作り、妊娠を得る必要がある。単に、長期に同居しても妊娠が得られないことも観察されていることから、排卵時期の短期間の雌雄同居は妊娠を得るための効率的な飼育管理に貢献するものと考えられる。以上から、現状の3日間同居（月経後11-14日）ではなく、7日間同居（月経後11-18日）のように同居期間を延長することで、同居期間に排卵する個体の割合は48.9%（23/47）から63.8%（30/47）に上昇することから、有効な繁殖方法になるものと考えられる。

また、未経産雌においては、排卵が推察できない個体が19.1%で観察され、経産個体と比べ有意に高い割合であることが確認された。排卵が推察できない個体のホルモンを測定した性周期の次の月経が長期に認められないことも確認される。これがどのような原因で生じているかを明らかにすることで、繁殖不適個体として抽出し、排除することで、繁殖用コロニーのスリム化、つまり無駄な個体の維持および交配を行わないことで、より安定した個体供給に繋がると考えられる。

カニクイザルの初潮は3-4才に確認される。このようなことから今回調べられた5-6才の未経産雌においては、若すぎることから性周期が安定していない可能性が考えら

れる。排卵時期が推定できなかった個体が2割近くも存在したことはこの考えを支持する一つの理由である。一方、経産雌については、8-21才と年齢的に性周期が安定している可能性がある。そのため、未経産個体と比べ、経産個体は月経後11-14日の間に排卵が推定される個体が有意に高く、また、排卵を推定できなかった個体が有意に低い要因であると思われる。しかし、未経産個体において、早期に繁殖するか否かの判断はコロニーのスリム化には必要である。このような観点から、特に若い未経産個体においては、月経後11-18日の7日間に雄と同居することが、効率的に妊娠を得る一つの有効な手段であると考えられた。

E. 結論

今後の繁殖コロニーを担う若い未経産雌において、従来考えられていた排卵時期が延びていることが確認された。これは繁殖効率を大きく低下させる要因の一つであることから、コロニーのスリム化の観点からも、繁殖方式の変更を行う必要性が大いにあることが判明した。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

1) [Nobuhiro Shimozawa](#), Ryoichi Ono, Manami Shimada, Hiroaki Shibata, Ichiro Takahashi, Hiroyasu Inada, Tatsuyuki Takada, Tetsuya

Nosaka, Yasuhiro Yasutomi. Cynomolgus monkey induced pluripotent stem cells established by using exogenous genes derived from the same monkey species. *Differentiation*, 85:131-139, 2013.

2) Masanori Hatori, Nobuhiro Shimozawa, Lubna Yasmin, Hirofumi Suemori, Norio Nakatsuji, Atsuo Ogura, Ken-ichi Yagami, Tadashi Sankai. Role of retinoic acid and fibroblast growth factor 2 in neural differentiation from cynomolgus monkey (*Macaca fascicularis*) embryonic stem cells. *Comparative Medicine*, *in press*.

2. 学会発表

1) 下澤律浩、藤城修平、水上喜久、阿部朋行、花園豊. カニクイザル初期胚を用いた ES 細胞の特性に関する検討. 第 54 回日本卵子学会、2013 年 5 月、東京.

2) 冷岡昭雄、成田勇人、前島正雄、東郷 睦、小野文子、下澤律浩. 血中ホルモンの測定による人工授精時期の検討. 第 60 回日本実験動物学会、2013 年 5 月、茨城県つくば市.

3) 木村展之、岡林佐知、小野文子、上田直也、下澤律浩、保富康宏、柳澤勝彦. Retromer の加齢性局在変化と Dynein 機能障害との関係. 第 32 回日本認知症学会、2013 年 11 月、長野県松本市.

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

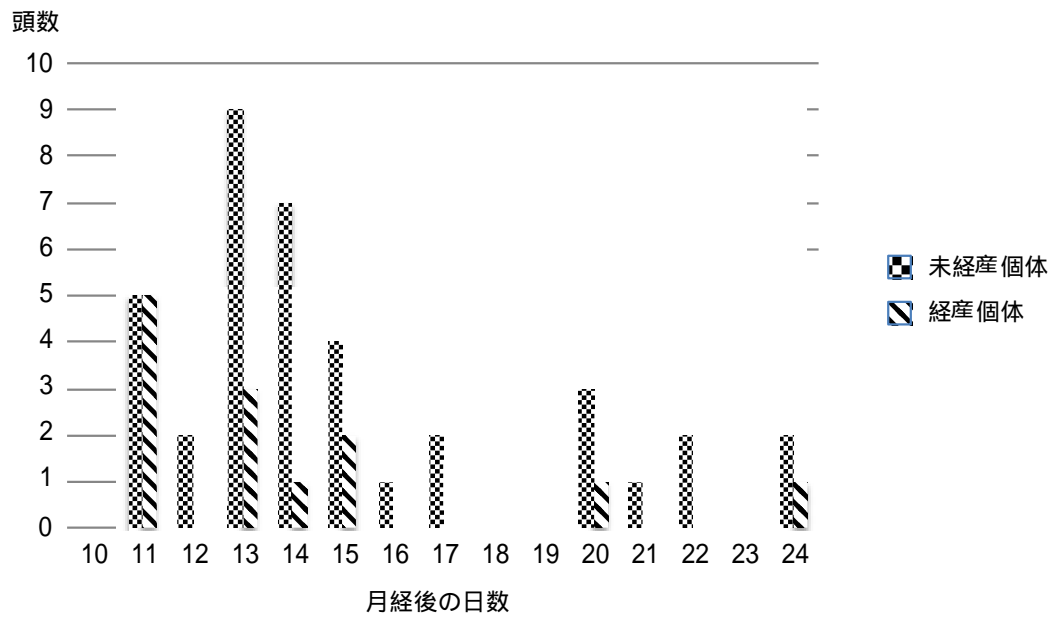


図1. 推定された排卵時期

厚生労働科学研究費補助金（創薬基盤推進研究事業）
分担研究報告書

霊長類循環器疾患モデルの解析に関する研究

研究分担者 揚山直英 独立行政法人医薬基盤研究所
霊長類医科学研究センター 主任研究員

研究要旨

近年、再生医療研究等の必要性が高まるに伴い、ヒトと近縁な霊長類の各種疾患モデルを用いた研究が増加する傾向にある。しかしながら、未だヒト病態を忠実に反映した霊長類の循環器疾患モデルの報告は少ない。こうしたことから、霊長類循環器疾患モデルを構築し、その詳細な解析を行うことで、心臓病態学、生物資源研究のみならず医科学研究や厚生労働行政への貢献が大いに期待される。今回は、MRI を用いて心電図同期や呼吸同期、造影 MRI 等の撮像法を樹立し、霊長類における心臓および肝臓病態の解析を行った。その結果、拡張型心筋症個体においては心臓壁運動のびまん性低下、また肝腫瘍個体においては造影効果による腫瘍描写に成功した。さらに、病理組織学的検索においてもそれらの所見を裏付け、心筋の線維化領域を抽出する事にも成功した。これらの結果は霊長類循環器疾患および肝疾患がヒト病態を忠実に反映し、モデルとしての可能性を示唆するものである。さらにこれらの解析を通し樹立された画像診断を用いた評価系が今後、霊長類疾患モデルの安全性・有効性評価等に有用なツールとして役立てられることが示唆された。今後はさらなる解析を通し、霊長類資源としての可能性を模索する予定である。

A．研究目的

循環器疾患は世界各国で大きな問題となっており、その病態解明、新規診断・治療法開発研究は極めて重要である。しかしながら、未だヒト病態を忠実に反映した霊長類の循環器疾患モデルの報告は少ない。こうしたことから、霊長類において循環器疾患個体を構築し、その詳細な解析を行う事ができれば、心臓病態学、生物資源研究のみならず医科学研究や厚生労働行政への貢献が大いに期待される。

再生医療・遺伝子治療・創薬研究などにおいては霊長類を用いた有効性・安全性評価の需要が今後ますます増え続ける事が予想される。それら評価の方法としてはイメージング技術を用いた評価系が最適である

ことから、霊長類における画像診断を樹立することが必須となる。

そこで今回我々は、MRI を用いた心電図同期や呼吸同期および超常磁性酸化鉄微粒子（SP10）投与による撮像法を駆使し、霊長類における心臓および肝臓における病態の詳細な解析を試みた。

B．研究方法

これまで、カニクイザル繁殖コロニーにおいて超音波、心電図、X 線、各種血液検査などにより樹立されている拡張型心筋症モデルを対象として、3T-MRI を用い、心電図および呼吸同期撮像法を用いた Cine-MRI

を撮像することにより、心臓壁運動の評価を行った。さらに同検査等により確認された肝腫瘍が疑われる個体においては呼吸同期撮像法および超常磁性酸化鉄微粒子 (SPIO) 投与による造影 MRI を行う事によって腫瘍病変部の抽出を行った。さらに、これら個体から得られた心臓および肝臓の病理組織学的検索を行いそれぞれの MRI 所見と比較した。

(倫理面への配慮)

本研究は医薬基盤研究所の動物実験委員会の承認を受け、さらに法律第 105 号「動物の愛護および管理に関する法律」、文科省通知「大学等における動物実験について」、日本霊長類学会「サル類を用いる実験遂行のための基本原則」、霊長類医科学研究センターの指針である「サル類を用いた実験の詳細」を遵守して遂行した。動物の取扱は全て麻酔下で行う等、苦痛の排除に努め、動物飼育管理にも万全の配慮を行い実験を実施した。

C . 研究結果

拡張型心筋症

対象となるカニクイザルは心拍数が早く (平均 150bpm 程度)、呼吸が浅いため麻酔濃度や同期スピードなどの調整が必要ではあったが、3T-MRI において心電図および呼吸同期撮像を適応することによって Cine-MRI の画像を得る事に成功した。それらを用いて拡張型心筋症個体二頭の撮像を行った結果、正常個体と比較していずれも明らかな左心室壁運動のびまん性の低下が認められた (図 1)。これはこれまで得られた超音波、心電図、X 線、各種血液検査などとも一致し、左室機能不全の病態を忠実に描写しているものである。さらに、死亡した一頭の病理組織学的検索において認

められた左室心筋の全周性の線維化層の所見は MRI 所見を支持するものであった。また、これら病理組織標本から線維化面積を抽出することにも成功した (図 2)。

肝腫瘍

呼吸同期撮像法および SPIO 投与による造影 MRI により、肝臓短軸断の T2 強調画像において腫瘍組織と正常組織のコントラスト増強効果を得る事が出来、右葉左葉に広く分布する肝腫瘍の局在診断を行う事に成功した (図 3)。これは正常な肝臓に存在するクッパー細胞が SPIO を貪食することによって MRI による信号が低下し、クッパー細胞が存在しない腫瘍病変部の信号がより強調されて抽出される造影効果によるものであり、霊長類の肝腫瘍個体で初めて造影 MRI の所見を得ることに成功した。また、肝臓の病理組織学的検索では肝細胞に強い異型性と浸潤性を認め、低分化の肝臓原発悪性腫瘍所見が示された。

D . 考察

拡張型心筋症

心電図および呼吸同期撮像法を用いた Cine-MRI により認められたびまん性の左心室壁運動低下は拡張型心筋症の病態である心不全状態を忠実に再現するものである。さらに病理組織学的検索から得られた全周性の線維化層とそれら MRI 所見が一致する事から本モデルがヒト病態を忠実に反映する事が示唆された。これらのことから本モデルがヒトのモデルとして有用な生物資源である事が示唆された。さらに、線維化面積を抽出する事に成功したことから、拡張型心筋症モデルや心筋線維化を伴う循環器疾患の新たな病態定量評価の可能性が示唆された。

肝腫瘍

MRI を用いた SPI0 造影により、霊長類で初となる腫瘍病変部の抽出に成功し、局在診断が可能であることを示した。また、造影効果による正常組織と腫瘍病巣のコントラストからは腫瘍が低分化の肝臓原発悪性腫瘍である事が示唆され、病理組織学的所見より得られた肝細胞の異型性と浸潤性所見との一致が認められた。これらのことから肝腫瘍個体も有用な霊長類生物資源としての可能性が示唆された。

これら MRI を用いた心電図および呼吸同期撮像による Cine-MRI、また SPI0 投与による造影 MRI が霊長類において樹立されたことで、画像診断を用いた評価系が霊長類疾患モデルを用いた安全性・有効性評価等の各種研究に有用なツールであることが示唆された。

E . 結論

本研究により、カニクイザル繁殖コロニー内に存在する拡張型心筋症モデルの詳細な解析から、本モデルがヒト病態を忠実に反映し、医科学研究に重要な資源である事が明らかとなった。さらに、肝腫瘍個体の解析を行う事で、新たなモデルとしても可能性が示唆された。さらに、これらの詳細な解析を通して樹立された MRI を用いた画像診断評価系は霊長類資源を用いた研究推進のための重要なツールであると言える。今後はさらなる霊長類循環器疾患モデル等の詳細な解析を通し、霊長類資源の新たな可能性や各種病態と加齢性変化との関連性等を模索したい。

F . 健康危険情報

特になし

G . 研究発表

1. 論文発表

(雑誌)

- 1) 揚山直英、霊長類における循環器疾患モデルの紹介、心電図、33号、S-2-87～S-2-94、2013

(書籍)

- 1) 揚山直英 (分担翻訳)、16章：不整脈と伝導障害の治療、監訳者：金山喜一、鯉江洋、臨床家のための犬猫の心臓病マニュアル、interzoo、2013、336-355

2. 学会発表

- 1) 揚山直英、鯉江洋、川嶋晴子、岡林佐知、金山喜一、山海直、保富康宏：心拍変動解析を用いたカニクイザルにおける加齢性変化、第60回日本実験動物学会総会、茨城、2013年5月15日-17日
- 2) 伊藤 康世、鯉江洋、柴田宏昭、岡林佐知、片貝祐子、大野智恵子、金山喜一、保富康宏、揚山直英：再生医療評価系としての霊長類を用いたセルトラッキングシステムの開発、第60回日本実験動物学会総会、茨城、2013年5月15日-17日
- 3) Naoki Saito, Hideto Chono, Hiroaki Shibata, Naohide Ageyama, Yasuhiro Yasutomi, Junichi Mineno, NONHUMAN PRIMATE MODEL FOR HIV-1 GENE THERAPY USING ENDORIBONUCLEASE MazF TRANSDUCE CD4+ T CELLS IN THE PRESENCE OF SHIV 89.6P INFECTION、第19回日本遺伝子治療学会学術集会、岡山、2013年7月4日-6日
- 4) Miyako Igarashi, Naohide Ageyama, Yuko Katakai, Nobuyuki Murakoshi, Yoshiaki Yui, Kenji Kuroki, DonZhu

Xu, Yukio Sekiguchi, Hiroshi Tada, Yasuhiro Yasutomi, Kazutaka Aonuma, A Non-human Primate Model of Atrial Fibrillation with Atrial Electrical and Structural Remodeling using Atrial Tachypacing、第28回日本不整脈学会学術大会、東京、2013年7月4日-6日

- 5) 齊藤尚紀、蝶野英人、柴田宏昭、揚山直英、保富康宏、峰野純一、RNA分解酵素MazFを用いたHIV感染症遺伝子治療法開発 - SHIV89.6P感染霊長類モデル - 、第27回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2013年11月20日-22日
- 6) Naohide Ageyama, Hiroshi Koie, Haruko Kawashima, Sachi Okabayashi, Yasuyo Ito, Kiichi Kanayama, Tadashi Sankai, Yasuhiro Yasutomi, Age-related Changes in Heart Rate Variability in Nonhuman Primate, 64th AALAS National Meeting, MD, USA, 2013/10/27-31
- 7) Yasuyo Ito, Hiroshi Koie, Hiroaki Shibata, Sachi Okabayashi, Yuko Katakai, Chieko Ohno, Kiichi Kanayama, Yasuhiro Yasutomi, Naohide Ageyama, Cell tracking in non-human primates using magnetic resonance imaging, 64th AALAS National Meeting, MD, USA, 2013/10/27-31

2. 実用新案登録

特になし

3. その他

特になし

H . 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得

特になし

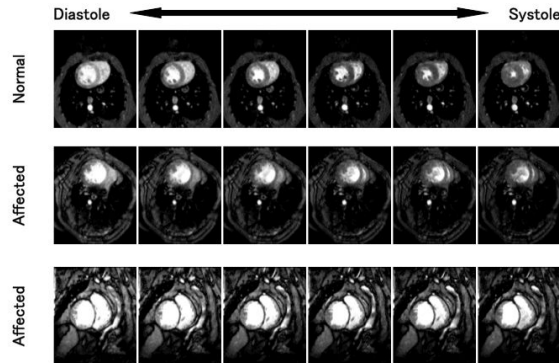


図1

心電図および呼吸同期にて撮像したCine-MRIの画像。

上段の正常個体に較べ中・下段の発症個体はいずれも収縮期にかけての収縮が不全である。

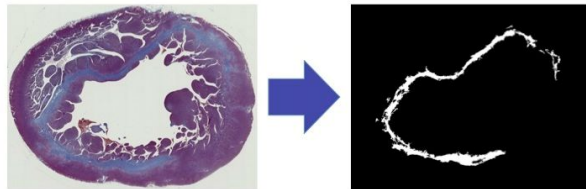


図2

MRI撮像にてびまん性の壁運動低下が認められた個体の病理組織切片。

マッソントリクローム染色にて青色に染色される線維化部分が左心室全周に認められた（左図）。その染色部位を蛍光顕微鏡により線維化領域として抽出し、面積を算出する事に成功した（右図）。

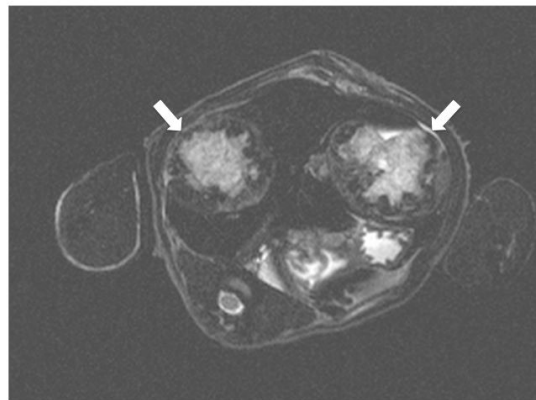


図3

SPIOの造影効果により肝臓短軸のT2強調画像。

腫瘍組織と正常組織のコントラスト増強効果が認められた（白矢印）。肝臓はSPIOを取り込んだクッパー細胞により低信号となるがクッパー細胞を有さない腫瘍組織は高信号となり病巣が抽出される。

厚生労働科学研究費 創薬基盤推進研究事業
分担研究報告書

カニクイザルモデルを用いたウイルス感染症に関する研究

研究分担者：岡村 智崇

医薬基盤研究所 霊長類医科学研究センター 研究員

研究要旨

エイズワクチン研究においてサルエイズモデルは極めて重要であり、SIV 感染マカク属サルを用いた研究が多数行われている。霊長類医科学研究センターでは、インドネシア、フィリピン、マレーシア産地を把握したカニクイザルの SPF 繁殖コロニーを確立し、良質なカニクイザルの供給体制を整えている。しかし、これまでの報告で原産地別カニクイザルを用いたサル免疫不全ウイルス感染実験の報告は少ない。本研究では産地および系統が明らかな SPF カニクイザルを用いて SIV とカニクイザルの感染系の確立を試みる。SPF カニクイザルに SIVmac239 および SHIV89.6P をそれぞれ静脈内より接種を行ったところ、SIVmac239 に感染したカニクイザルのウイルス量は、Set Point で平均 1.8×10^6 /ml であった。CD4+T 細胞は感染初期に大きな変化はなく、接種後 50 週を超えて、減少傾向が認められた。SHIV89.6P に感染したカニクイザルでは、Set Point で平均 9.4×10^5 /ml であり、CD4+T 細胞は、接種直後から急激な減少が認められた。組織中の CD4+T 細胞の保存状況を検討するため、接種後 34 週において鼠径リンパ節を解析したところ、SIVmac239 接種群では CD4+T 細胞のわずかな減少が確認されたが、SHIV89.6P 接種群では CD4+T 細胞は喪失していた。これらの結果から、カニクイザルの SIV および SHIV の病態の一部が明らかとなった。

A. 研究目的

エイズワクチンの研究にはインド産アカゲザルを用いた動物実験が行われているが、アカゲザルの系統や産地によって、エイズウイルスに対する反応性が異なることが報告されているため、新たなサルエイズ動物モデルが求められる。

霊長類医科学研究センターでは、SPF 化されたカニクイザルを繁殖し、実験に供給することが可能である。カニクイザルはアカゲザルよりも小型で取り扱い易く、世界中で様々な動物実験に用いられている。しかしながら、エイズウイルスに対する感受性・病原性といった詳細な研究は行われていない。

本研究では、当センターで繁殖育成された産地や系統が明らかになっている SPF カニクイザルを用いて、サル免疫不全ウイルス (SIVmac239) およびサルヒト免疫不全ウイルス (SHIV89.6P) の病態を明らかにする。これ

までの研究で、カニクイザルに接種する SIVmac239 分子クローンの *in vitro* の解析を終えている。本年度はウイルス接種後のウイルス量や CD4+T 細胞の動態について検討した。

B. 研究方法

1. 接種スケジュール

エイズ病態を明らかにするため、各産地 SPF カニクイザル 10 頭に SIVmac239、5 頭に SHIV89.6P の静脈内接種を行った。ウイルス接種後、ウイルスコピー数、CD4+T 細胞数および免疫学的解析を行った。

2. ウイルスコピー数および CD4+T 細胞数

ウイルスコピー数は、血漿からウイルス RNA を抽出し、SIVgag 特異的 Primer および probe を用いて Real time PCR を行った。また CD4+T 細胞数の算定には、フローサイトメーターを用いて検討した。

3. 組織中における CD4+T 細胞の保存

ウイルス接種後 34 週において鼠径リンパ節を採取し、CD4+T 細胞の保存状況をフローサイトメーターおよび免疫組織学的染色を行い検討した。

4. 倫理面への配慮

本研究では動物実験申請等の必要な委員会での承認は既に得ており、ヒトサンプル、情報等は一切用いていない。

C. 研究結果

1. ウイルスコピー数および CD4+T 細胞の動態

SIVmac239 に感染したカニクイザルのウイルス量は、Viral Peak で平均 6.5×10^7 /ml、Set Point で平均 1.8×10^6 /ml であった。CD4+T 細胞は感染初期に大きな変化はなく、接種後 40 週を超えて、減少傾向が認められた。SHIV89.6P に感染したカニクイザルでは、Viral Peak で平均 1.8×10^8 /ml、Set Point で平均 9.4×10^5 /ml であり、CD4+T 細胞は、接種直後から急激な減少が認められ、慢性期においてもほぼ喪失していた（図 1A, B）。

2. 組織中における CD4+T 細胞の保存

ウイルス接種後、34 週における鼠径リンパ節について Anti-CD4 抗体を用いて免疫組織学的染色を行った。SIV 感染サルでは、やや CD4+T 細胞の減少が認められ、SHIV 感染サルでは、CD4+T 細胞の喪失が確認された（図 2A）。またフローサイトメーターを用いて詳細に解析したところ、非感染サルの CD4+T 細胞（%）は平均 66.7%、SIV 感染サルの CD4+T 細胞（%）は平均 42.9%とやや減少が確認された。SHIV 感染サルの CD4+T 細胞（%）は、平均 1.9%とほぼ喪失していた（図 2B）。

D. 考察

エイズワクチン研究で用いられるアカゲザルのエイズ動物実験は、世界中で行われている。しかしながらアカゲザルの産地・系統に

よりウイルスの感受性が異なることが報告されており、アカゲザルに代わるエイズ動物モデルが必要であると考えられる。

カニクイザルは、世界中であらゆる感染症の研究に用いられており、実際にカニクイザルを用いたエイズワクチン研究も行われている。しかし、カニクイザルと SIV の病態に関する詳細な研究は行われてはいない。そのためエイズ動物モデルとして、カニクイザルを用いるならば、SIV の病態ならびにカニクイザルの産地・系統によるウイルス感受性の差異や免疫応答を明らかにするのは極めて重要である。

本研究において、免疫不全ウイルス感染後のカニクイザルの病態が一部明らかとなった。SIVmac239 および SHIV89.6P 感染後のウイルス量は、産地に関係なく高いウイルス血漿を呈した。このウイルス量は、過去に報告されているインド産アカゲザルのウイルス量とほぼ同程度であることが確認された。また SHIV89.6P 接種後、CD4+T 細胞が急激に減少し、血中および組織中において CD4+T 細胞が喪失しているが、現在のところエイズ発症はみられない。経過観察を行い、エイズ発症が確認されれば病態について詳細な解析を行いたいと考えている。さらに今後、ウイルス感染後の免疫応答と病態との関連性について検討していく予定である。

E. 結論

カニクイザルの SIV 病態が一部、明らかになり、今後エイズワクチン研究の動物モデルとしての可能性が示唆された。

F. 健康危機情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表
特になし

2. 学会発表

「国内」

(1) 岡村 智崇、松尾 和浩、保富 康宏
：抗酸菌分泌抗原を組み込んだ弱毒エイズウイルスの霊長類カニクイザルにおける細胞性免疫反応の解析 第61回日本ウイルス学会 神戸 2013年11月10日-12日

(2) 岡村 智崇、松尾 和浩、保富 康宏
産地別 SPF カニクイザルを用いたサル免疫不全ウイルスのエイズ病態に関する研究
第27回日本エイズ学会 熊本 2013年11月20-22日

「国際」

特になし

H. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

特許出願

なし

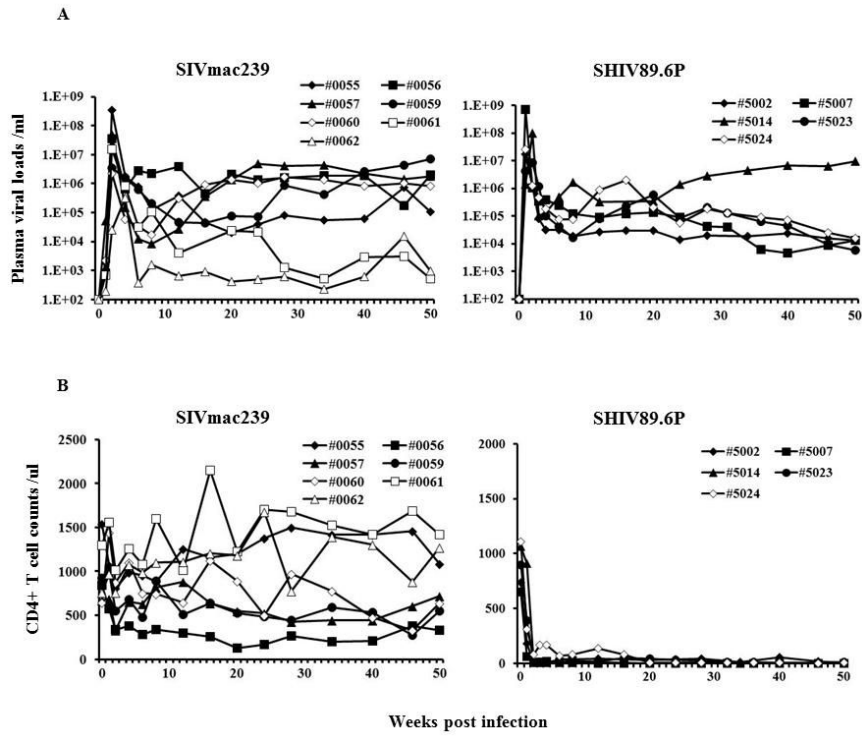


図1 SIVmac239 および SHIV89.6P 接種後のウイルス量および CD4+T 細胞。(A) リアルタイム PCR 法を用いたウイルス量。(B) フローサイトメーターを用いた CD4+T 細胞数。

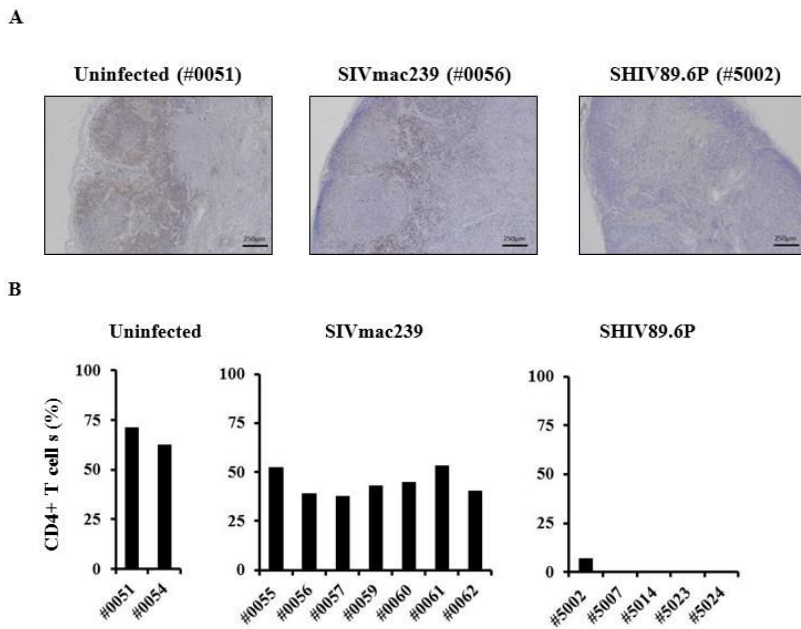


図2 SIVmac239 および SHIV89.6P 接種後 34 週におけるリンパ節における CD4+T 細胞の割合。(A) Anti-CD4+ 抗体を用いた免疫組織学的染色。(B) フローサイトメーターを用いた CD4+T 細胞の割合。

厚生労働科学研究費補助金（創薬基盤推進研究事業）

分担研究報告書

PTEN 抑制物質投与による霊長類誘起排卵数増加法の基礎的検討

分担研究者：鈴木 治（独）医薬基盤研究所 難病・疾患資源研究部 主任研究員

研究要旨

動物資源の計画的な増産・系統保存には効率的な誘起排卵法が必須である。私は、これまでにマウスをモデルとして PTEN 阻害剤投与による誘起排卵数増加の可能性を検討してきた。そこで本研究では、投与時期や PTEN 阻害剤の選択、および系統差を検討した。誘起排卵数増加には PMSG と同時に PTEN 阻害剤を投与するのが最も効果的で、前日では作用が弱く、PMSG 投与の翌日など後の時期ではむしろ抑制的であった。一方、PTEN 阻害剤による排卵数増加傾向は系統により異なり、卵巣内 PTEN 蛋白質含量の系統差と関係があると思われた。PTEN 阻害剤は bpV(pic)以外に 4 つの製剤の卵巣への影響を調べたが、bpV(pic)が最も作用が強かった。このように PTEN 阻害剤によるマウスの誘起排卵数の増加は有望だが、投与時期や卵巣内 PTEN 量を配慮する必要があると思われた。霊長類への応用には霊長類卵巣での PTEN 量の調査が必要であろう。

A. 研究目的

動物資源の計画的な増産・系統保存には排卵誘起（通常、自然排卵数より多い卵子が排卵されるため過剰排卵処理、もしくは過排卵処理と呼ばれる）が汎用されるが、例えばマウスの排卵誘起で得られる卵子数には大きな系統差があり（Suzuki et al. *Reprod. Fert. Dev.* 1996, 8(6):975-980）、低反応マウス系統からの採卵は深刻な問題となっている。

低誘起排卵数の克服法として、配偶子形成過程および成熟過程で何らかの手を加え、系統差が生じる原因を採卵前に排除できれば、誘起排卵効率のさらなる向上が期待できると考えられる。しかし、現在のところ低繁殖個体に対し採卵前にいわゆる「排卵障害治療」を検討した研究は稀である。

そこで私は、ヒト不妊治療を参考に各種薬剤を卵子採取前に雌個体に投与することにより、排卵誘起効率を向上させる方法を検討してきた。近年、原始卵胞の活性化機構が注目され（Li ら, *Proc Natl Acad Sci USA* 107: 10280-10284, 2010）、Phosphatase and Tensin Homolog Deleted from Chromosome 10 (PTEN)

が原始卵胞の活性化を抑制的に制御していることが明らかとなった。以前、私は PTEN の阻害剤の一種 Dipotassium bisperoxo (picolinato) oxovanadate (V)（略称：bpV(pic)）の投与後、性腺刺激ホルモンを併用するという新規の排卵誘起法によって誘起排卵数が増加する可能性をマウスモデルで見いだした。

そこで本研究では、さらに PTEN 阻害剤の至適投与時期や作用の系統差、および卵巣内 PTEN 蛋白質含量との関係についてマウスをモデルとして調べ、PTEN 阻害剤併用による誘起排卵の向上効果とその機序についてさらに詳しく検討した。bpV(pic)以外の PTEN 阻害剤の効果についても調べた。

B. 研究方法

1) PTEN 阻害剤を併用した過排卵誘起
PTEN 阻害剤として Dipotassium bisperoxo (picolinato) oxovanadate (V)（略称：bpV(pic)）を用いた。bpV(pic)（Enzo）をリソソーム液に溶解した。これまでの研究から 1 匹当たりの bpV(pic)の腹腔内投与量を 30 μ g に設定した。

投与時期について 3 条件を設定し (図 1) , bpV(pic) と性腺刺激ホルモンの併用による誘起排卵への効果を調べた。PMSG を投与する日を 28 日齢の日とし, 設定した日付に bpV(pic) を腹腔内投与した。PMSG 投与後, その 48 時間後に hCG を投与し, 更に約 16 時間後, パラフィンオイル (Zenith Biotech.) で覆った TYH 培地 (三菱化学メディエンス) 小滴内へ卵管膨大部より卵子卵丘細胞複合体を採取し, ヒアルロニダーゼ処理 (300 iu/mL, Sigma) により卵丘細胞を分散させ, 卵子数を記録した。

2) 誘起排卵に対する bpV(pic) 作用の系統比較 A/J マウスと同様に, C57BL/6N, ICR, DBA/2, C3H/HeJ について, PMSG と同時に 30 μ g の bpV(pic) を腹腔内投与する群と対照群としてリンゲル液のみを腹腔内投与する群を設定し, 誘起排卵数への bpV(pic) 投与の影響を調べた (図 2) 。

3) 蛋白質の定量 Western blot 解析 卵巣を測定時まで Allprotect Tissue Reagent (Qiagen) 内で冷蔵保存した。卵巣から個体毎に ReadyPrep™ protein extraction kit (Total Protein 用, Bio-Rad) を用いて蛋白質を抽出し, 各種蛋白質の定量 Western blot 解析を行った。抽出した蛋白質 (約 0.3 μ g) を 4-12% NuPAGE® Bis-Tris ゲルと NuPAGE® MES SDS ランニングバッファー (Invitrogen) による SDS-PAGE の後, PVDF 膜 (Pall) へ転写し, 一次抗体として抗 PTEN 抗体 (1 : 10,000, CST, ウサギ抗体) または抗 Müllerian Inhibiting substance (MIS, anti-Müllerian hormone, AMH と呼ばれる) 抗体 (1 : 10,000, Santa Cruz, ヤギ抗体) と抗 Glyceraldehyde 3-phosphate dehydrogenase (GAPDH) 抗体 (1 : 50,000, Millipore, マウス抗体) を, 二次抗体 (Jackson ImmunoResearch) として Peroxidase ラベル抗ウサギ IgG 抗体もしくは抗ヤギ抗体 (1 : 20,000) および Peroxidase ラベル抗マウス IgG 軽鎖特異的抗体 (1 : 50,000) を用いて免疫染色を行った。視覚化には化学発光 (ECL

plus, GE もしくは Pierce) を用い, CCD カメラ (LAS3000-Multi, Fujifilm) にて発光像を記録し, 各バンドの発光強度を測定した (Multigauge ソフトウエア, Fujifilm) 。全サンプルを等量混合した液を 4 段階の量でアプライして検量線を毎回作成し, 目的蛋白質と GAPDH のバンドの発光強度から GAPDH を内部標準として目的蛋白質発現量を「目的蛋白質 / GAPDH 比」として求めた (検量線作成法については Exp Anim 60(2) : 193-196, 2011 を参照) 。

4) 卵巣 PTEN 蛋白質含量の系統間比較

4 系統の 4 週齢の雌マウスより得た卵巣の PTEN 蛋白質含量の系統間比較を行った (図 3A) 。さらに PTEN 阻害剤の作用との相関について検討した (図 3B) 。

5) PTEN 阻害剤の検討

bpV(pic) 以外の PTEN 阻害剤 4 種について卵巣への効果の有無を検討した (Hydroxy(oxo)vanadium 3-hydroxypyridine-2-carboxylic acid trihydrate, VO-HOpic, Sigma; Potassium bisperoxo(bipyridine)oxovanadate (V), bpV(bipy), Merck; Potassium bisperoxo(1,10-phenanthroline)oxovanadate (V), bpV(phen), Merck; Dipotassium bisperoxo(5-hydroxypyridine-2-carboxyl)oxovanadate (V), bpV(HOpic), Merck) 。各 PTEN 阻害剤について 2 用量の投与群および対照群 (リンゲル液のみ) で注射後の卵巣の変化を経時的に観察した。すなわち, 28 日齢の A/J マウス 10 ~ 11 匹に各種 PTEN 阻害剤を腹腔内投与し, 毎日 2 匹ずつ (一部 3 匹) , 1 ~ 4 日目に卵巣を採取し, 卵巣体重比 (図 4) および卵巣 MIS 蛋白質含量 (図 5) を比較した。

6) 統計処理

数値の有意差については正規性を Shapiro-Wilk 検定で, 等分散性を Levene 検定で確認した後, 各用量で薬物投与の有無の間の差を分散分析により判定した。正規性, もしくは等分散性が保証されない場合は

Kruskal-Wallis One Way ANOVA on Ranks にて検定した。相関については線形回帰分散分析を行った。 $p < 0.05$ を有意とした。

(倫理面への配慮)

動物を用いた実験は、(独)医薬基盤研究所の動物実験規定に従い、実験計画の承認を得て実施した(承認番号: DS25-44)。

C. 研究結果

1) bpV(pic)の投与時期と排卵数

bpV(pic)は、A/J マウスにおいて PMSG 投与と同時に打つと排卵数が増加する傾向が見られた($p=0.075$, 図 1A)。一方、PMSG 投与の翌日、もしくは2日後(hCG 投与日)に bpV(pic)を投与すると排卵数を抑える傾向が見られた(図 1B)。

2) bpV(pic)投与による排卵数増加の系統差

A/J, C57BL/6N, ICR では bpV(pic)投与群のほうが対照群に比べ排卵数が多い傾向があったが、DBA/2 では変化せず、C3H/HeJ ではむしろ排卵数が抑制される傾向があった(図 2)。

3) 卵巣 PTEN 含量と bpV(pic)の作用との関係

4 系統の卵巣内 PTEN 蛋白質含量には系統差が有り(特に A/J と C3H/HeJ 間で有意, 図 3A), PTEN 含量と bpV(pic)による排卵数増加率([bpV(pic)群の平均排卵数]/[対照群の平均排卵数])とは正の相関の傾向($p=0.052$, 図 3B)が見られた。

4) 他の PTEN 阻害剤の効果

bpV(pic)以外に購入可能な4つの PTEN 阻害剤について、卵巣体重比(図 4)や卵巣内 MIS 含量(図 5)への影響を調べたが、bpV(pic)と同様の影響がある薬剤はなかった(bpV(pic)の結果は省略)。

D. 考察

本研究では、PTEN 阻害剤 bpV(pic)による誘起排卵数増加効果の時期特異性、および系統差、さらに他の PTEN 阻害剤の効果について検討した。

雌個体への PTEN 阻害剤 bpV(pic)投与には時期特異性が見られた(図 1)。特に PMSG 投与と

同日に打つと排卵数の上昇を来す有望な方法だと考えられた。しかし、PTEN が抑制されていけばよいという訳ではなく、PMSG 投与後ではむしろ PTEN の抑制は排卵数低下を招いた。このことは、排卵数増加には PI3K 経路の活性化の後、再び PTEN などにより抑制されることが重要であると思われた。

PTEN の排卵数決定への関与はマウス一般に当てはまるはず、すなわち、A/J で見られた排卵数増加効果は他の系統でも見られるはずと考えていたが、実は系統により異なっていた。このことは排卵数決定機構には、今までに知られていない複雑な制御機構が存在することを示唆している。今後の研究課題となろう。本研究では bpV(pic)より良い PTEN 阻害剤は見つからなかったが、A/J でしか調べていないので、系統差があることを鑑みると系統との組み合わせで判断すべきものと思われる。この点については本研究では十分な検討は出来なかった。

このように PTEN 阻害剤は系統依存的ではあるが、有望なマウス過排卵の促進剤たり得ることがわかった。特に排卵数の決定に PTEN が時期特異的に、かつ、様々な程度で関わるといふ新たな知見が得られたことから、PTEN 阻害剤の活用には、こうした PTEN の関与の違いがどのように排卵数の決定に関わるのか、これを支配する分子は何かを探求する必要があると思われる。また、マウス以外でも卵巣 PTEN 含量の高い個体であれば PTEN 阻害剤の効果が期待できると考えられる。PTEN 阻害剤による誘起排卵数増加を霊長類に応用するには、霊長類の卵巣における PTEN 含量の調査が必要と思われた。

E. 結論

本研究の結果から雌マウス個体への PTEN 阻害剤は性腺刺激ホルモンによる誘起排卵数を増加させる有望な方法であるが、系統差があり、卵巣 PTEN 含量に依存することがわかった。PTEN 阻害剤による霊長類での誘起排卵数増加が期待できるかを推定するには、霊長類卵巣

の PTEN 含量の調査が必要であろう。

F. 健康危険情報

該当なし。

G. 研究発表

1) 論文発表

1. Iwata, Y., Ohtake, H., **Suzuki, O.**, Matsuda, J., Komamura, K., and Wakabayashi, S. (2013) Blockade of sarcolemmal TRPV2 accumulation inhibits progression of dilated cardiomyopathy. *Cardiovasc Res* 99(4): 760-768.
2. **Suzuki, O.**, Koura, M., Noguchi, Y., Uchio-Yamada, K., and Matsuda, J. (2013) Zygosity determination in hairless mice by PCR based on *Hr^{hr}* gene analysis. *Exp Anim* 62(3): 267-273.

2) 学会発表

1. **Suzuki, O.** Search for plasma biomarkers for dilated cardiomyopathy using a mouse model with sialyltransferase transgenes. *Experimental Biology* 2013. 平成 25 年 4 月 20 日 ~ 24 日. Boston, MA, USA
2. **鈴木治**. 遺伝子導入による心筋症疾患モデルマウスの解析手技. *BIOtech* 2013. 平成 25 年 5 月 8 日 ~ 10 日. 東京
3. **鈴木治**, 小浦美奈子, 野口洋子, 山田-内尾こずえ, 松田潤一郎. マウス精巣上体精の受精能に及ぼす resveratrol の効果. 第 60 回日本実験動物学会総会. 平成 25 年 5 月 15 日 ~ 17 日. つくば
4. 小浦美奈子, 河相晶子, 中野正文, 小川純輝, 野口洋子, **鈴木治**, 松田潤一郎. 創薬支援をめざす医薬基盤研究所「実験動物研究資源バンク」の活動状況. 第 60 回日本実験動物学会総会. 平成 25 年 5 月 15 日 ~ 17 日. つくば
5. **鈴木治**, 小浦美奈子, 野口洋子, 山田-内尾こずえ, 松田潤一郎. PTEN 阻害剤によるマウス誘起排卵効率化の試み. 第 64 回日

本卵子学会. 平成 25 年 5 月 25 日 ~ 26 日. 東京

6. **Suzuki, O.** Attempt to Enhance Superovulation Efficiency in Mice with a PTEN Inhibitor. *ENDO* 2013. 平成 25 年 6 月 15 日 ~ 18 日. San Francisco, CA, USA
7. **鈴木治**. PTEN 抑制剤投与によるマウス卵巣の組織学的変化. 第 106 回日本繁殖生物学会大会. 平成 25 年 9 月 12 日 ~ 14 日. 府中
8. **Suzuki, O.** Effect of Resveratrol Treatment on in vitro Fertilizability of Mouse Epididymal Sperm. 64th AALAS National Meeting. 平成 25 年 10 月 27 日 ~ 31 日. Baltimore, MD, USA
9. 錦織充広, 八木寛陽, 望月明和, 佐々木一樹, 岩田裕子, 若林繁夫, **鈴木治**, 松田潤一郎, 南野直人. 拡張型心筋症モデルマウスのプロテオーム解析に基づく疾患発症メカニズムの解明. 第 17 回日本心血管内分泌代謝学会総会. 平成 25 年 11 月 22 日 ~ 23 日. 豊中
10. **鈴木治**. 拡張型心筋症の血中バイオマーカー候補としての 3 型エノラーゼ. 第 36 回日本分子生物学会年会. 平成 25 年 12 月 3 日 ~ 6 日. 神戸
11. **Suzuki, O.** Enhanced superovulation in A/J mice by the PTEN inhibitor bpV(pic) and gonadotropins. 2013 Annual Meeting of the American Society for Cell Biology. 平成 25 年 12 月 14 日 ~ 18 日. New Orleans, LA, USA
12. **Suzuki, O.** Superovulation in A/J mice using a combination of gonadotropins and the PTEN inhibitor bpV(pic). 2014 IETS Annual Conference. 平成 26 年 1 月 11 日 ~ 14 日. Reno, NV, USA
13. **Suzuki, O.** The PTEN Inhibitor, bpV(pic), may Enhance Superovulation in Mice. AAAS 2014 Annual Meeting. 平成 26 年 2 月 13 日 ~ 17 日. Chicago, IL, USA

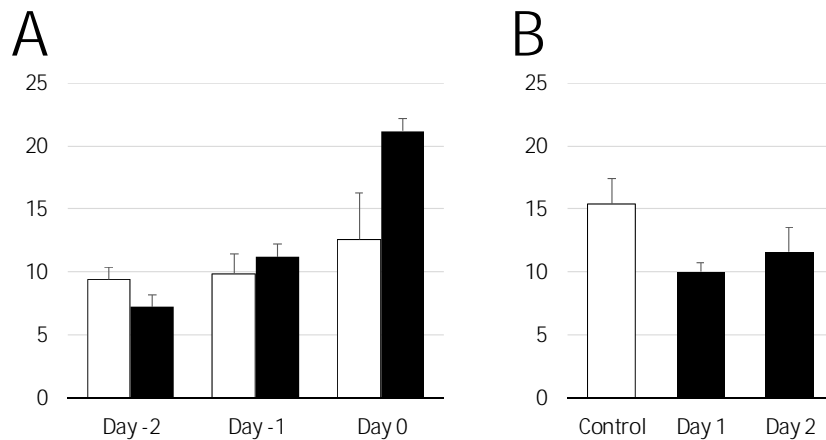


図 1. bpV(pic)を併用した過排卵誘起。各実験群の排卵数の平均 \pm 標準誤差 (n=5) を示す。A) bpV(pic)もしくはリンゲル液のみを PMSG 投与 2 日前 (Day -2), 前日 (Day -1) および当日 (Day 0) に投与した場合, 対照群 () に比べ bpV(pic)投与群 () で排卵数が多い傾向, すなわち, 排卵数の増加傾向が見られた (Day -2, Day -1 は過去データ)。B) PMSG 投与後, 翌日 (Day 1) と 2 日目 (hCG 投与日と同じ, Day 2) に bpV(pic)を投与すると () 未投与群 () に比べ排卵数が少ない傾向が見られた。すなわち, PMSG 投与後の PTEN 阻害剤投与は排卵数を抑制する傾向があることがわかった。

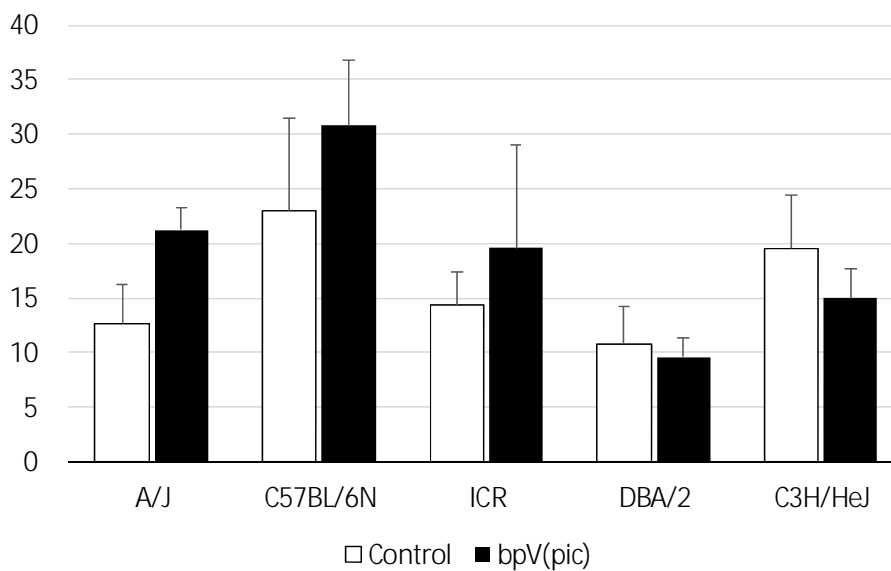


図 2. マウス 5 系統における bpV(pic)を併用した誘起排卵数 (平均 \pm 標準誤差, n=5)。A/J は図 1 の Day 0 の結果を転記したものである。対照群 () に比べ bpV(pic)投与群 () に比べ, A/J, C57BL/6N, ICR については上昇傾向, DBA/2 では変わらず, C3H/HeJ ではむしろ抑制されることがわかった。このように bpV(pic)の誘起排卵数への影響には系統差があることがわかった。

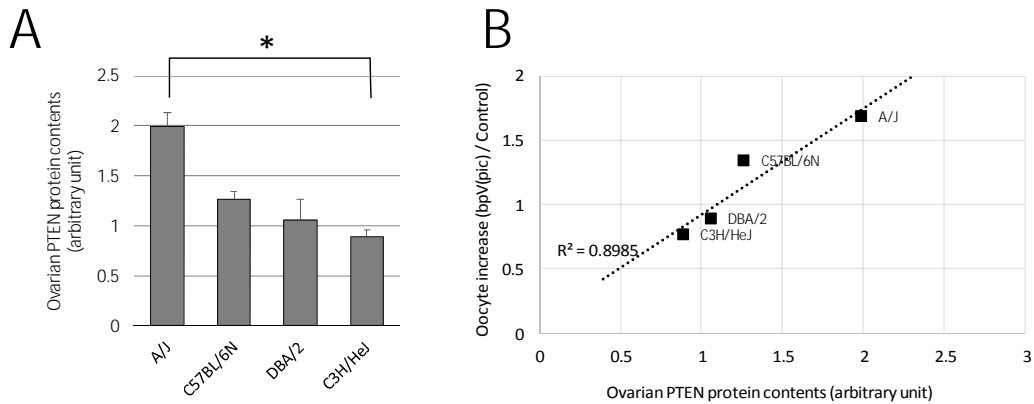


図 3. 卵巣内 PTEN 蛋白質含量と PTEN 阻害剤の誘起排卵効率向上効果の関係。A) 4 系統の卵巣内 PTEN 蛋白質含量には系統差が見られた (A/J と C3H/HeJ の間に有意差あり)。B) PTEN 含量と bpV(pic) による排卵数増加率 ([bpV(pic) 群の平均排卵数] / [対照群の平均排卵数]) とには正の相関の傾向 (線形回帰, $p=0.052$) が見られた。PTEN の排卵数決定機構への寄与には系統差があることがわかった。

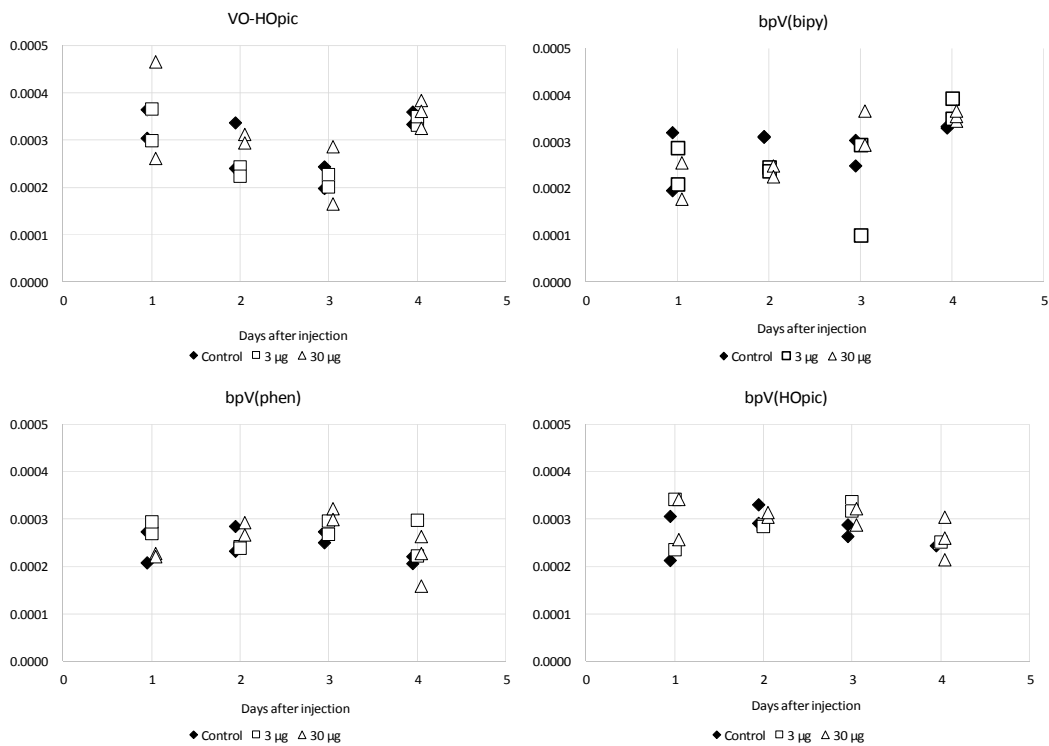


図 4. PTEN 阻害剤 4 種投与後の卵巣重量/体重比 (n=2, 一部 n=3, 個々のデータを表示)。各種 PTEN 阻害剤またはリンゲル液 (対照) を 28 日齢 A/J 系雌マウスに投与後 (Day 0), Day 1 から Day 4 まで毎日 2 匹毎 (一部 3 匹) に卵巣を採取して秤量し, 体重を測定した。対照群 (, リンゲル液のみ) に比べ, どの PTEN 阻害剤投与群 (: 3 µg/head ; : 30 µg/head) でも差はあまり無かった。

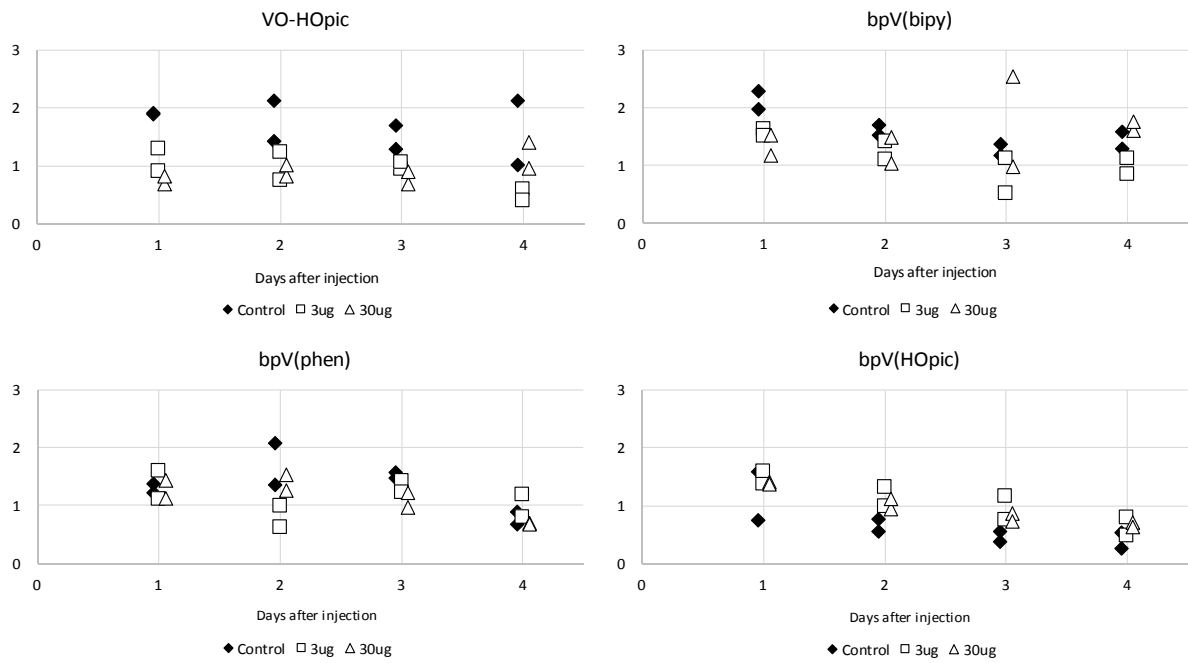


図 5. PTEN 阻害剤 4 種の投与後の卵巣 Müllerian inhibiting substance (MIS) 蛋白質量の変化 (GAPDH を内部標準とした arbitrary unit ; n = 2 , 個々のデータを表示)。 MIS の量は発育卵胞数の尺度と言われており , 原始卵胞の活性化の指標と見ることが出来る。しかし , 対照群 (, リンゲル液のみ) に比べ , どの PTEN 阻害剤投与群 (: 3 μ g/head ; : 30 μ g/head) でも差はあまり無かった。

厚生労働科学研究費補助金(創薬基盤推進研究事業)

分担研究報告書

医科学研究に重要な霊長類資源の繁殖・育成と疾患モデルの作製・解析 カニクイザル MHC class-Iのタイピング解析

分担研究者 高橋一郎 (医薬基盤研究所 難病・疾患資源研究部)

研究要旨

感染症を引き起こすウイルス感染に対して感受性があるか或いは抵抗性かは、MHC の class I が重要な働きを持っていると考えられている。そこで基盤研霊長類センターで飼育管理されているカニクイザル個体より作成された株化 B 細胞株で MHC class I A ローカス、B ローカスからの発現しているタイプを調べウイルス感染との相関を調べた。

カニクイザル 8 個体より作成された B 細胞株で発現している MHC class I について A ローカスおよび B ローカス特異的なプライマーで増幅しクローニングしてシーケンス法で同定した。それぞれ 20 クローン以上クローニングしたクローンをとりシーケンスし、カニクイザル MHC データベースと比較し発現しているクローンを同定した。

A. 研究目的

霊長類センターで飼育管理しているカニクイザルコロニーの遺伝学的解析を行うことにより、コロニーの特色を把握し実験用カニクイザルの高度化を図り資源としての価値を高める。またヒトの疾患モデルとしてカニクイザルを使用するための基礎データとして、MHC 遺伝子の発現情報を蓄積する。

アカゲザルでの MHC class-I のタイピングおよびゲノム解析した結果の整備がすすんでいるが、カニクイザルについては、体系的に進んでいない。そこで感染症に対する防御を担っている MHC class I を調べることで、実験動物のカニクイザルの資源の高度化を図ることを目的とする。

B. 研究方法

カニクイザル個体より採血された血液より B 細胞を株化した細胞を作製した。

カニクイザル B 細胞株については SIV 感染前に作成され、作製後に SIV 感染実験を行い感染の成立、感染の非成立が行われた。これら B 細胞株 8 株より遺伝子発現している RNA を抽出し MHC type I 特異的なプライマーで PCR 増幅後クローニングし約 20 クローンをシーケンスして塩基配列を MHC データベースで検索し比較した。

C. 研究結果

カニクイザル 8 頭より作製された不死化 B 細胞株より発現している MHC class I 遺伝

子をクローニングしてクローンを取り、それぞれ塩基配列を決定した。各個体の B 細胞株からそれぞれ A ローカス、B ローカス 20 数個のクローンをシーケンスしたが、解析できたのが、表の数字である。それをそれぞれカニクイザル MHC のデータベースと比較して対応するクローンを同定した。取れてくるクローンと発現しているクローンが同じ(クローニング効率がどれも同じ)と仮定すると単一なものしか発現していないもの、2クローンが発現しているもの主要なものが1個でマイナーなものが発現しているものなど、個体によりまちまちであった。B 細胞株より発現している MHC class I A ローカス、B ローカスは、複数発現しており、これらの塩基配列を決定し、クラスタ解析を行った。SIV ウィルス感染抵抗性個体と感染感受性個体との MHC クラス I の特異的なタイプは特定できなかった。ただし近縁のアカゲザルの報告から抵抗性を付与すると考えられる分子の発現がみられる個体があった。

D. 考察

霊長類の実験動物として最もポピュラーであるカニクイザルについて、MHC のタイピングは非常に重要な情報であるが個体で発現している MHC の情報はクローンの塩基配列情報の登録は多くなされているが、その MHC 分子の発現により知られている感染症ウィルス感染に対して感受性かあるいは抵抗性かは報告がない。これについては多く

の個体で発現している MHC を解析し感染抵抗性の固体の数を増やして解析する必要がある。

それとともに複数のアレルの関与も考えられ2個体からの結果からは判定できないが、少なくとも2個体では違うアレルが働いていると思われる。

またアカゲザルで感染抵抗性を付与すると報告のある Mamu-B*07:04 と相同性のある、Mafa-B*017:01 の発現が確認されたが、個体では感染が成立していた。

E. 結論

MHC class I 抗原は感染症の抵抗性を付与することが知られており、あらかじめ抵抗性を付与する MHC class I 分子の発現を調べることができたとしたら実験動物としてのカニクイザル資源の高度化に役立つと考えられる。ただし MHC 分子の発現のデータの蓄積と解析が必要であると考えられる。

F. 健康危険情報

特になし。

G. 研究発表

なし。

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

なし。

個体	A locus		B locus	
#051	Mafa-A1*087:01	6	Mafa-B*137:01	5
	Mafa-A1*054:01	1	Mafa-B*010:01	4
	Mafa-A1*001:03	1	Mafa-B*109:03	1
			Mafa-B*019:03	1
#054	Mafa-A1*003:01	4	Mafa-B*140:01	7
	Mafa-A1*010:02:01	3	Mafa-B*004:03	3
	Mafa-A1*001:03	1	Mafa-B*141:01	1
			Mafa-B*143:01	1
#017	Mafa-A1*008:02	4	Mafa-B*095:01	7
	Mafa-A1*052:02	4	Mafa-B*033:02	3
			Mafa-B*116:01	2
			Mafa-B*050:02	1
			Mafa-B*017:01	1
			Mafa-B*157:01	1
#002	Mafa-A1*100:01	4	Mafa-B*007:01:01	6
	Mafa-A1*007:02	2	Mafa-B*118:01	3
	Mafa-A1*003:02	2	Mafa-B*098:02	1
	Mafa-A1*001:03	2	Mafa-B*030:03:02	1
	Mafa-A1*002:01:02	1	Mafa-B11L*01:04	1
#014	Mafa-A1*052:02	6	Mafa-B*068:02	9
	Mafa-A1*008:02	6	Mafa-B*157:01	4
			Mafa-B*116:01	1
			Mafa-B*144:02	1
#023	Mafa-A1*076:01	12	Mafa-B*018:01:02	7
	Mafa-A1*066:02	3	Mafa-B*068:02	5
	Mafa-A1*070:01	1	Mafa-B*015:01	4
			Mafa-B*019:01	2
			Mafa-B*050:02	2
#024	Mafa-A1*009:01	12	Mafa-B*090:01	5
	Mafa-A1*040:02	1	Mafa-B*144:02	3
			Mafa-B*069:02	3
			Mafa-B*011:01	2
			Mafa-B*098:06	2
			Mafa-B*137:01	1
#28	Mafa-A1*087:01	14	Mafa-B*010:01	8
			Mafa-B*045:02	2

図： MHC class I 遺伝子 A ローカス、B ローカスの発現パターン